「郷土芸能を守ることはカッコ悪いことじゃない」

誰かがやらなければならないことがある

三浦 健太郎さん
みうら　けんたろう

剣舞とバスケットボールを愛する青年。母方の祖父の影響で幼いころから剣舞に興味を持ち、小学生から舞い手を続ける。両親、妹、祖父母の6人暮らし。衣川区池田西在住。21歳。

郷土芸能が抱える問題

衣川区で900年の歴史を誇る川西大念仏剣舞の踊り手として活躍する三浦健太郎さん(21)。若手の成長株として、周囲の期待を一身に集めています。

三浦さんは、母方の祖父が川西大念仏剣舞保存会長、父・重雄さん(51)も若いころに踊り手を務めるなど、剣舞とのつながりが深い環境で育ちました。

地元の衣里小学校では4年生以上になると全員がこの剣舞に取り組みます。一部の子どもたちはさらに同好会として、保存会の大人が奏でる囃子(はやし)に合わせ、各地で演舞を披露しています。

多くの郷土芸能が伝承されている本市は、小中学校での郷土芸能の取り組みが盛んです。にもかかわらず、郷土芸能団体の多くが後継者不足に悩んでいるのが現実です。この理由について「中学や高校に進むと特に部活優先になってしまい、そのまま離れていってしまうのではないかと思う。あと若い人たちには、郷土芸能をやっていることが「カッコ悪い」「古臭い」などと思う人も多いのでは」と三浦さん。

自身も中学から始めたバスケットボール部の活動が忙しく、剣舞にもアルバイト感覚で時々参加する程度となっていました。

自分の存在意義見出す

高校卒業後地元の酒造会社に就職。社会人として本格的に剣舞を踊り始めました。「実際に後継者が居ないという現実を見て、自分がやるしかないと思った。自分が本当に剣舞を好きだったからだと思う」。それまでは踊るときだけ借りていた面や衣装を、自分専用として預けられ、責任感も出てきました。

三浦さんが今一番力を入れているのは、自分の剣舞に対する思いを子どもたちに伝えていくこと。郷土芸能に取り組むことが「カッコ悪いことでなく」「恥ずかしいことでもない」ことを、自分が踊る姿から感じてほしいと願っています。

最近、1人の高校生が初めてステージで演舞を披露しました。また小学1年生のおいが、練習している三浦さんの踊りを意味も分からずまねる姿を見て「そのために自分はやっているんだ」と感じたそうです。

「自分自身もまだまだ半人前」と話すとおり、練習では保存会の人たちから動作などについて細かな注文が付きます。「年配者と付き合うことで世の中の多くのことを学んだ。注文が多いのも期待されているからだと思う」と研さんを重ねる日々が続きます。

三浦さんが使用している面。役は前九年合戦、後三年合戦で死んだ武士の亡霊

わたしの思い みんなに伝えたい

この道に生きる若者から

胆沢劇場など住民参加による演劇ですばらしいことは、人と人との交流です。
公募で集まった年代の違う人たちが心を1つにして作品を作り上げていく。
それぞれ刺激し合うことが、人間として成長させていくのだと思います。

小野寺 直也さん

剣舞を踊っている時は無心。踊っているだけでとにかく楽しいです。もし剣舞がなかったらどんな人生になっていたことか。人には、何でもいいから一生懸命になれることが必要だと思います。

三浦 健太郎さん

まちに根ざしてきた伝統産業を確実に継承し、鋳物産業がより発展していくため、新たな可能性を模索しています。
鋳物を通じてまちに貢献していきたいと思っています。

及川 敬一さん

障害者野球は、野球をしたことがない人でも、打つ、守る、投げるのどれかができればできます。市の障害者野球チームを作りたいと思っていますので、仲間を増やしていきたいですね。

千葉 直希さん

子どもたちがわたしに近づいてくるときは、必ず何か話があるときです。
どんなに忙しくても必ず話を聞いてあげてください。いじめている子も、いじめられている子もみんな同じです。
そして、親の素直な気持ちも話してあげてください。

菊池 真紀さん